

異文化を考える

都留文科大学英文学科 教授 林 信義

都留文科大学では、来年度に「比較文化学科」の開設が予定されていますが、小さな地方大学としていかに国際性を発揮できるかがカギになりそうに思います。

国際的とか、異文化といった表現が巷にあふれる中で、このような言葉に何となく実体がないイメージを抱き、あまり身近に感じないのが実情だと思われれます。

ここで異文化比較の立場で身近かな言葉を捉えてみると何が見えるか、遊び心でしてみましよう。

衣食住の一つの食文化は極めてよく知られている文化ですが、これについても言葉と文化の興味深い関係があります。例えば日米の食文化を比較すれば、日本は「煮る文化」、アメリカは「焼く文化」であることが台所を見ればわかります。日本の台所は鍋であふれています。アメリカではサイズの異った無水鍋が数個あれば平均的でしょう。そのかわりに、常にオーブンが活躍しています。

次に、これを言葉から見るとどうなっているかを述べますと、煮る文化では、鍋を用いた調理用語が多いの比べ、焼く文化ではオーブンを用いた調理用語が多いことがわかります。アメリカ人が日本の調理を紹介している記述を見る

と、「煮る」は、「炊く」は、「cook」(クック)となり、「蒸す」は、「steam」(スチーム)、そして、「茹でる」は、「boil」(ボイル)となっています。ところが日本の煮る用語は、このような単純な表現に留まらず、「煮崩す」とか、「熾火蒸らし」といった芸術的な感じさえする表現をも含む広がりを持っています。これに対応する英語表現には、「cook」のあとに「over」(オーバー)を付けて、時間を余分にかけると感じを出した表現で切り抜けています。他にも「湯掻く」や「焚き込む」等、対応する表現を副詞等を補って作る

ことになり、また、その文化特有の方法や道具については、あてはまる表現が全くないこともありません。

一方アメリカの「焼く文化」は、一口に焼くといっても、ご存知のように、パンを焼くのは、「bake」(ベイク)、肉を焼くのは、焼き方によって、「broil」(ブロイル)、「grill」(グリル)、「steak」(ステーキ)と表現が豊かです。「煮る文化」は焼くという表現で処理しています。

また、食し方にも大きな違いがあります。例えば、「スープを飲む」の場合の「飲む」は、英語では食べるという「eat」(イート)を使います。スープを食べるとい

うのは、「食べる」という動作についての概念が、たとえ液体が主であっても、フォークやスプーン等を用いた場合は食べることになるからです。ドリンクするのはグラスやカップから直接口に流し込む場合なのです。

食文化一つとり上げてみても、身近で、素朴なところに興味深いものが沢山あります。

異文化を知ったり、紹介したりすることは、欧米人に活き造りを出して驚かせたり、日本文化についてほとんどわからないうちに、茶会で抹茶を飲ませたりすることばかりが、文化交流のフルコースではないことです。あまり日本伝統文化にこだわって、知らず知らずうちに、私たちさえ生活の中で消えかかっているものを、日常の中の伝統文化として紹介してしまっていることはありません。祭典的な文化交流だけでは本当の意味で深まっていけないでしょう。

異文化に興味をもち、それを知ることが少しずつ相手の人々が見えてくるものです。国際結婚をした方々が早く相互に理解し合えるのは、生活を通して異文化にふれているからかも知れません。

都留文科大学学園祭 『桂川祭』開催される

11月1日から4日まで、「4次元ポケット」をテーマに『桂川祭』が開催されました。バンド演奏や模擬店など、様々なイベントが繰り広げられ、若い人たちの熱気であふれていました。



都留文科大学
国文学科・国語国文学会
秋季講演会

日時 12月12日(土)
午後1時30分
場所 都留文科大学
新研究講義棟
1階大講義室

講師 立正大学教授
文芸評論家
保昌 正夫先生

演題 横光・川端・井伏の文学
入場 無料

都留文科大学合唱団
第27回定期演奏会

12月5日(土)
開場 午後3時30分
開演 午後4時
都留文科大学音楽棟Mホール
入場無料

♪第1ステージ
混声合唱組曲
「月光とピエロ」

♪第2ステージ
混声合唱のためのドラマ
「星からの招待」

♪第3ステージ
「GLORIA」